

北海道 みなとまち紀行

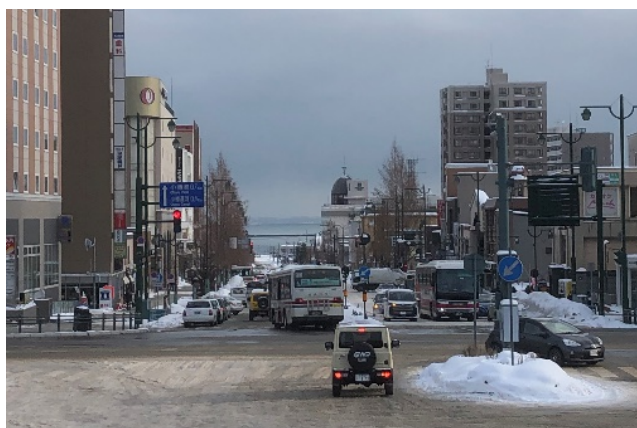
小樽編②

第 2 号



■小樽編②

今回も小樽で歴史探訪とガラス工芸を楽しむ旅です。まず、JR 函館線の小樽築港駅で降りて徒歩で北海道開発局小樽港湾事務所向向かいしました。建物に入ってすぐ右に併設されている「みなとの資料コーナー」（以下、本稿では「おたるみなと資料館」という）へ。ここには明治以来の小樽港建設の歴史が展示されています。再び JR で小樽築港駅から小樽駅へ。中央通りを下って小樽運河沿いにある小樽市総合博物館運河館に行き、石川館長にお話を伺いました。それから旧大家倉庫、日本銀行、旧百十三国立銀行を巡って北一ヴェネツィア美術館、北一硝子クリスタル館でガラスとクリスタルの工芸品を堪能し、花園 3 丁目で土産を買って小樽駅から「エアポート」で札幌に帰る行程です（地図①）。



小樽駅から港が見える。それは港町の大きな魅力

【おたるみなと資料館】

小樽築港駅に着くとウイングベイ小樽の大きな建物が目に入ります（地図②）。エスカレーターで 2 階に上り改札口を出ると、石原裕次郎の等身大のポスターがにこやかに迎えてくれました。駅を出て左に曲がり通路を出ると、目の前に石狩湾と防波堤に守られた小樽港が広がっています。近くに南防波堤、そして島防

波、遠くに北防波堤が伸びています。日本で初めて外海に向かって建設された北防波堤をはじめ、それらの防波堤がどのようにして造られていったのかを分かり易く説明してくれる「おたるみなと資料館」がある小樽港湾事務所向向かいしました（地図③）。徒歩で 3 分ほど行くと 3 階建てのタイル張りの建物が見えてきました。玄関に着くと右手に資料館があります。資料館に入ると、初代所長の廣井勇博士と第 2 代所長の伊藤長右衛門の略歴と博士の著作、そして防波堤の建設の写真が整然と並んでいました。なかでも、伊藤所長が恩師の廣井博士に宛てた嵐の後の状況を報告した手紙には、子弟の情愛と防波堤建設にかける気迫と責任感を感じました。図面ではわかりにくい北防波堤の構造も、模型を見れば一目瞭然！納得でした。



小樽港湾事務所。手前の建物 1 階に「おたるみなと資料館」がある



工事写真、廣井博士の著作、模型などが並ぶ

その後、2 階の所長室を特別に拝見させていただきました。奥の白壁には初代と第 2 代の所長であった廣井勇博士と伊藤長右衛門の写真が飾っており、厳かな雰囲気が漂います。偉大な先輩に見られているようで、所長としては緊張しますよね。



小樽港湾事務所長室に掛けられている廣井勇(左)と伊藤長右衛門の写真

【小樽市総合博物館運河館】

小樽駅に降り港に向かって坂を下ると(地図④)、運河に沿った道路の手前に瓦葺の屋根にシャチホコを載せた木造軟石張りの小樽市総合博物館運河館が建っています(地図⑤)。明治26年(1893)に営業用倉庫として建てられた小樽倉庫です。北前船主である西出孫左衛門と西谷庄八によって造られ、小樽海運業の隆盛を偲ばせる建造物です。ちなみに、西出孫左衛門は石川県橋立を代表する北前船主で、明治期に函館に拠点を移し1890年代後半から汽船経営に転換しました。また、紋別・礼文に大規模な漁場を所有し、函館銀行の取締役にもなりました。



シャチホコを載いた旧小樽倉庫。小樽市総合博物館運河館は奥(右)の建物

倉庫は中庭を囲むように配置されています。その一部を利用して小樽市総合博物館運河館が開館しています。ここでは小樽の自然、古代の生活、歴史を知ることができます。特に2万点におよぶ古写真のコレクションは圧巻で、デジタルデータ化され館内に備えてあるパソコンで検索して見るすることができます。

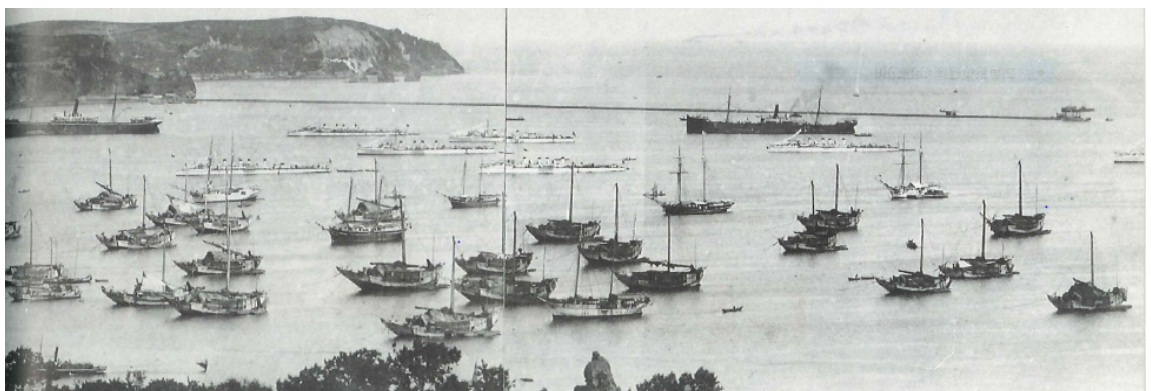


博物館を入ると松前船の模型とその関連資料が迎えてくれる

博物館の中に入り、受付で館長の石川直章さんをお願いいただくと、すぐに出てこられました。そこで古写真のコレクションの中でのオススメ写真をお聞きしたところ、即座に頭上の写真を指されて「これは北防波堤建設当時の小樽港の様子です。撮影者が撮りたかったのは港の中央に浮かぶ白い軍艦でした。写真の手前は停泊場所を譲った北前船です」とのこと。



小樽市総合博物館の石川直章館長。古いアルバムを開いて調査中にお邪魔した



石川館長推薦の一枚「建設中の北防波堤」。入港した海軍の戦艦(白い船体)と多数の北前船(手前)、その奥には汽船が停泊している(提供画像:小樽市総合博物館奥山コレクション)

そして、向かい側の部屋にある北前船の帆と模型が展示されている部屋で北前船の説明をしていただきました。石川館長は、知る人ぞ知る廣井勇博士の大ファンで博士を「廣井先生」と呼びます。早速、明治の小樽の様子を日々記録した貴重な「稲垣益穂日記」を開き、明治36年（1903）に北防波堤から海に落ちそうな子供を救ったときの益穂自筆の絵を見せていただきました。

石川館長が考古学を専門とされているのに小樽の歴史にも詳しいのは、「学芸員たるものは市民からの問い合わせには全て答える責務があるため」とのことです。その蓄積を生かし現在、小樽の食についてご執筆中とお聞きしました。そこで小樽名物の「ぱんじゅう」についてその来歴をお聞きしました。石川館長によると、その元祖は明治期に東京・神田の表神保町に創業した「総本家七越」が考案した「七越ぱんじゅう」で、全国に支店を出しましたが、戦後は総本家を伊勢に移し伊勢名物として親しまれたものの平成12年（2000）に廃業したとのことでした。小樽には現在2軒が営業しているとお聞きしたので行ってみたのですが、この日は2件とも休日でした。記念にお店に貼っていた「ぱんじゅう」の写真を撮りました。「ぱんじゅう」の中身は、粒餡、こし餡、かぼちゃ餡、ゴマ餡、チョコレートなどです。



正福屋の店に貼ってあった「ぱんじゅう」の広告。

左上に餡やゴマの入った「ぱんじゅう」の写真が写っている

石川館長に送られて博物館を出た後、周辺を散策しながら北一硝子のヴェネツィア館とクリスタル館に向かいました。

【旧大家倉庫】

五代北前船主は、1890年代になると大型汽船を所有して汽船運賃積経営に乗り出しました。大家七平はその中の一人です。建物の外壁に札幌軟石を使用し、越屋根と入口部分の二重アーチが特徴です。妻壁に全（やましち）の印が刻まれ、その雄大さと独特の姿は運河地区の石造倉庫を代表する建物の一つです（地図⑥）。



旧大家倉庫

【日本銀行・第百十三国立銀行】

日本銀行小樽支店は、明治26年（1893）に開設された日本銀行小樽派出所が明治35年（1902）に小樽支店に昇格したものです。その後の日露戦争の勝利によって獲得した南樺太（サハリンの南半分）が小樽の商圈に入り、繁栄しました。現存する建物はルネッサンス様式の重厚で優美なレンガ造2階建てで、東京駅を設計した辰野金吾と銀行建築の設計で有名な長野宇平治によって設計され、明治45年（1912）に竣工しました。現在は「日本銀行旧小樽支店 金融資料館」になっています（地図⑦）。



日本銀行旧小樽支店金融資料館

第百十三国立銀行は、函館の旧場所請負人や江戸時代以来の廻船問屋が中心となって設立された北海道に本店をもつ最初の銀行で、北海道を代表する銀行の一つでした。その小樽支店の建物です。木骨石造 2 階建てで明治 23～27 年（1890～94）に開設されました。銀行の名称が「国立」となっているのは、明治 5 年（1872）制定の国立銀行条例に基づき、政府発行の不換紙幣の整理と殖産興業資金の供給を目的に設立されたことによるもので、いわゆる国立の銀行ではありません。

【北一硝子クリスタル館】

小樽は昔から漁業に使うガラス製の浮き球や石油ランプの生産が盛んで、ガラス製品を作る技術と伝統があります。小樽博物館の石川館長によると、小樽運河の埋立論争が激しかった頃、明治中期に建てられた古い倉庫を改造しガラス製品の製造・営業をしていた北一硝子が、当時若者に流行した「カニ族」用のお土産に作ったミニチュアのランプが大ヒットしたことにより、古い倉庫を利用したレトロな店と土産のセットが有力な観光と結びつくことに商工会議所は気づき、運河の埋立賛成派から反対派に転換します。そのことが運河保存の大きな力になったということでした。「カニ族」とは、高度成長期の頃、リュックに旅行に必要な物一式を詰め込んで全国を旅行して歩いた若者たちのこと。大きなリュックを背負い歩く姿がカニのようであったことに因んで名づけられました。



北一ヴェネツィア美術館

その北一硝子の社長が、古くからヴェネツィアに受け継がれてきた豊かで潤いのある本場のガラス工芸



北一ヴェネツィア美術館中央にゴンドラが置いてある

と文化を見せたいと昭和 63 年（1988）にオープンしたのがヴェネツィア館です（地図⑧）。建物の外観はヴェネツィアに現存する 18 世紀の貴族の邸宅をモデルとしており、館内では 18 世紀頃の様々な宮殿の建築様式と生活の様子を見ることができます。

【北一硝子クリスタル館】

ヴェネツィア美術館から少し南に行くと北一硝子クリスタル館があります（地図⑨）。ワイングラスやアクセサリーなど北一硝子オリジナルのクリスタル製品が並んでいます。やや年配の店員さんに最も価値のある作品をお聞きしたところ、2 階に案内されて拝見したのが繊細な松とそれを囲む人物を描いたクリスタル作品。高知県出身の世界的ガラス彫刻家・武政健夫^{たけまさたけ}さんの作品「松風」です。「見る角度によって松の周りにいる人物が現れたり消えたりします。透明度の高いクリスタルガラスの表面に銅板と研磨剤を使って彫刻しますので、高度で繊細な技術が必要です」とにこやかに説明してくれました。



北一硝子クリスタル館



世界的なガラス彫刻家・武政健夫作「松風」。
見る角度によって人物が変わる

【花園 1 丁目の和菓子屋さん】

きらびやかなガラス工芸を鑑賞した後は、小樽で育った友人が太鼓判を押す花園 1 丁目の新倉屋花園本店へ(地図⑩)。日が暮れて暗い雪道を上ると、行く手に「花園だんご」の明かりが見えてきました。お目当ての草餅は既に完売してしまいましたので、もう一つの目当てである豆餅と桜餅をお土産に注文しました。おなかすいたので、お土産とは別に店内の小さなテーブルで、きな粉とゴマの団子をいただきました。

実は、新倉屋の看板は「山型一刀流」という独特の餡のつけ方をした「花園だんご」の方です。このお店が花園だんごを作り始めたのは昭和 11 年 (1936) 頃で、庶民派の団子を見栄え良くして進物にも使ってもらえないかと考え、戦後に洋食ナイフを使って餡を山型につけるようになったのです。花園公園(小樽公園)は明治の頃から花見客で賑わう名所でした。花見をしながら団子をほおぼる桜の咲く季節を思いながら、団子をいただきました。また、お土産に買った豆餅は、きめの細かな練り餡で餅との相性がピッタリ、噛んだ時の触感が良く素材のうまさが十分に味わえる逸品でした。

(関口信一郎 記)

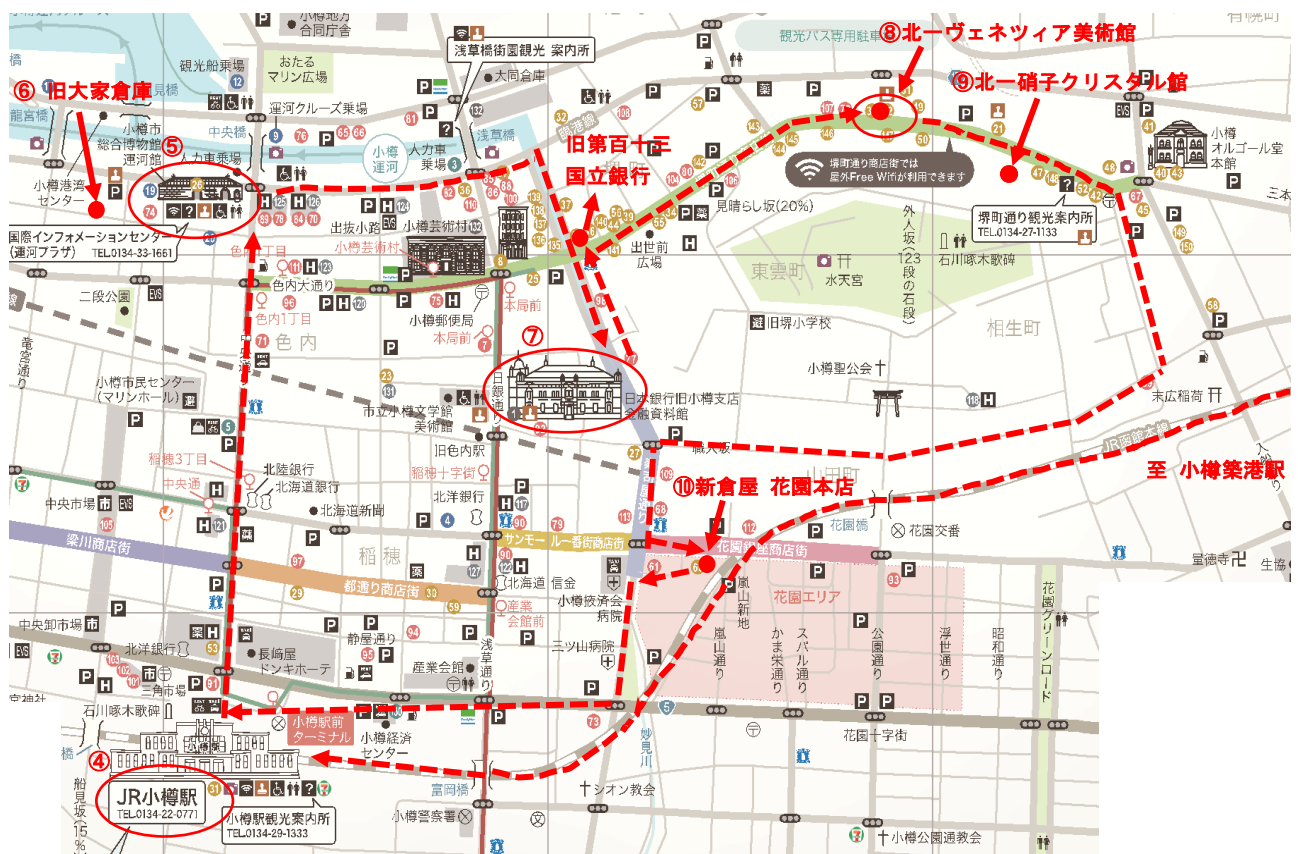


新倉屋花園本店。「花園だんご」の看板が窓ガラスに映る



閉店 1 時間前で、豆餅と団子はほとんど売り切れでした

【今回の散策ルート】



【今回の散策ミニ情報】

地図③

おたるみなと資料館

小樽市築港 2-2 小樽港湾事務所内

電話 0134-22-6131

開館時間 9:00～16:30

休館日 土・日曜、祝日

料金 無料

地図⑤

小樽総合博物館運河館

小樽市色内 2 丁目 1-20

電話 0134-22-1258

開館時間 9:30～17:00

定休日 年末年始

料金 大人 300 円 高校生 150 円

中学生無料

地図⑥

旧大家倉庫

(小樽市指定歴史的建造物 第 1 号)

小樽市色内 2 丁目 3-11

建築年 明治 24 年(1891)

地図⑦

日本銀行旧小樽支店 金融資料館

小樽市色内 1 丁目 11-16

電話 0134-21-1111

開館時間[4～11 月] 9:30～17:00

[12～3 月]10:00～17:00

休館日 水曜日(祝日は開館)

年末年始(12/29～1/5)

展示入れ替え時は臨時休館あり

入館料 無料

建築年 明治 42～45 年(1909～1912)

地図⑧

北一ヴェネツィア美術館

小樽市堺町 5-27

電話 0134-33-1717

営業時間 9:00～17:30

定休日 無休

入館料 一般 500 円 大学生 350 円

高校生 300 円

中・小学生 100 円

(特別割引料金)

65 歳以上 350 円

地図⑨

北一硝子クリスタル館

小樽市堺町 6-7

電話 0134-33-2995

営業時間 8:45～18:00

定休日 無休

地図⑩

新倉屋花園本店

小樽市花園 1 丁目 3-1(花園銀座街)

電話 0134-27-2122

営業時間 9:30～18:00

<連絡先>

NPO 法人 北海道みなとの文化振興機構

札幌市北区北 11 条西 2 丁目 2-17 セントラル札幌北ビル 5 階

e-mail アドレス mail@minatobunka-npo.info

ホームページ <https://minatobunka-npo.info>